

## ペイ・フォワード

岸部 麻里

旭川医科大学皮膚科学講座准教授

私にとって、今年は人生の節目の年になるだろう。子育てがひと段落するからである。すでに息子は進学で家を離れている。高校3年生の娘は、来春から一人暮らしをすると息巻いている。子どもと一緒に暮らす日々の終わりが近づき、喜びと寂しさが入り混じった複雑な気分を味わっている。

これまでのキャリアを振り返ると、常に育児との両立が課題にあった。私は医師になる前に息子を出産したが、なんらかの社会貢献をしたく、「育児を理由に仕事を辞めない」と決意していた。地元出身の強みで息子を実家に預けて働き、地方病院への単身赴任も経験した。入園式やお遊戯会は、夫が撮影したビデオで見た。PTA役員は務めたが、学校の親子行事にはほぼ参加していない。われながら母親としてどうかと思うが、早く医師として成長したいと思っていた。その後、大学院で娘を産んだあたりから状況が一変した。まず、実家に頼れなくなった。そして突如、想定外の事態がおこった。幼稚園児だった娘が精神的に調子を崩したのである。

子どもの気持ちに気づけなかった自分を責めた。小児科の先生の助言が胸に刺さった。信念を曲げて仕事を辞める決意をした。結局は時短で働くことになったのだが、これが想像以上に辛かった。時間的制約で思ったように働けず、何より周囲への申し訳なさを感じた。自宅と職場と託児所の往復で精一杯な中、今度は突如、海外留学の話が持ち上がった。家族会議の末、夫は息子と日本に残ることとなり、私は娘を連れて渡米した。メンタルに不安を抱える娘が、言葉の通じない海外の環境になじめるのか。実際はその心配は杞憂に終わり、彼女は外国生活に順応した。母娘2人、互いに支え合うしかない環境が娘を強くし



たのだろう。

もしあのとき仕事を辞めていたら、子どもが巣立った途端、生き甲斐を失っていたかもしれない。そう考えると若い先生方には、どんな形であれ、仕事を続けて自分の人生を充実させて欲しい。女性の社会進出がいまだ低い水準にあるわが国では、個人の努力だけで育児と仕事を両立するのは困難だと思うし、昇進意欲が湧くほどの余裕はないかもしれない。仕事の継続のみならず発展的なキャリア形成には、周囲の理解と支援が最低限必要だと思う。私が周りから受けたご恩には感謝してもしきれない。育児から解放されつつある現在、自らが後輩の支えとなって指導に関わることでそれを還元したい。そのペイ・フォワードの精神がさらに後輩へと引き継がれることを期待している。